

金沢文庫本『群書治要』経部鎌倉中期点の漢音

— 声母について —

佐々木 勇

一、本稿の目的

日本漢音は、呉音と比較して、体系的であるとされ、調点資料を用いてその実態が記述されてきた。その研究によつて、日本漢音の代表的資料とされている『蒙求』長承三年点・『大慈恩寺三藏法師伝』古点・『文鏡秘府論』保延四年点などは、唐代北方の秦音体系と一致する部分が多いことが明らかにされた。

しかし、その調査過程で、日本漢音資料として扱われてきた諸資料が一樣ではないことも、同時に知られてきた。

一資料内においても、たとえば、『佛母大孔雀明王経』の字音直読資料は、漢音を中心としながらも、新漢音形が比較的多く混入している。

よつて、日本漢音の全体像を捉えるためには、まず、個々の資料における体系記述をなす必要がある。

本稿は、その一環として、金沢文庫本『群書治要』経部鎌倉中期点における声母の体系を記述することを目的とする。

二、金沢文庫本『群書治要』経部の声母表記

日本漢音と中国中古音声母との対応関係は、先行研究によつて明らかにされている。ここでは、それに基づいて、金沢文庫本『群書治要』経部の声母を整理してみる。

(1) 幫・滂・並、非・敷・奉母

これらの声母は、日本漢音において、ハ行音で写されている。本資料でも、その通りである。

ただし、濁声点が加点された、以下の例がある。(挙例は、必要に応じて語句単位で掲出する。ただし、当該字以外の調点は、原則として省略する。以下同じ。)

幫母・魚籠(入聲濁)を(八385)魚籠(入聲濁)(七332)

濮(入聲濁)上(八91)濮(入聲濁)(六262)

城濮(入聲濁)(六98)

右二字の用例は、本資料における当該字声点加例の全例である。

「籠」は、『蒙求』諸本では、第九二句「籠冷王蜀」および第二〇三句「文伯羞籠」に用例が見られ、東洋文庫蔵本鎌倉中後期点および国会図書館蔵本一三七四年頃点に、濁声点加例が存する。しかし、『蒙求』諸本全体としては、単点の例が多い。また、三巻本『色葉字類抄』前田家本でも、「籠」(入)(上九四ウ6)と単点である。よつて、規範的には清音形と認識されていたものである。あるいは、「魚籠」という単語音として、濁音で定着していたものかもしれない。

「濮」は、書陵部蔵『春秋経傳集解』に、文永点よりやや時代の降る筆で「ボク」(一438)の仮名音注がある。現代日本語にも、「ボク」の音しか残っていない。本資料の例は、その比較的早期の例であろう。

並母・残暴(去濁)(九362) 奉母・飢乏(入濁)(八64)

「暴」は、他に去声単点の例が七例ある。よつて、右は、連濁による濁音形であろう。

「乏」も、他四例は入声軽点加例である(六230 496 778 851)。ただし、右例は、連濁例とは考えにくい。呉音「ボフ」の濁音が混入したものと考えるべきかもしれない。

(2) 明・微母

この二声母字は、日本漢音において、バ行とマ行で写される。基本は、バ行であり、マ行は撥音尾字に見られるとされる。

本資料においては、明母字に、ハ行の仮名音注が四二例見られる。その内の、三一例には、「靡(上濁)(八396 488)「睦(入聲濁)(八58)のように、濁声点が同時に加点されており、バ行で発音されたことが知られる。

これに対して、明母字にマ行の仮名が付されるのは、以下の二〇例である。

撥音尾字

江韻・敦彫を(五206)

唐韻・莽(上)のゴトシ(六487) 草莽に(六448)

桓韻・満(上)(八513 517) 刪韻・惰慢(去)(八91)

真韻・朝伍民(二)(八398) 庚韻・命(去)(二42)

青韻・螟(平)蝻(七200) 蝗螟(八221) 冥(七387)

先韻・瞑(去) 眩セザルトキンバ(二254)

仙韻・沈瀨(去)シテ(二293 311) 耽瀨(上)シテ(三365)

流瀨(去)シテ(七335) 緇(上)然トシテ(十181)

撥音尾字以外

泰韻・昧(去)爽に(十176) 昧(去)に(二155)

皆韻・邁(去)邁タリ(三411)

右のとおり、撥音尾字以外の「昧」「邁」にも、「マイ」の付音がある。この両字は、興福寺蔵『大慈恩寺三藏法師伝』古点・長承本『蒙求』・『文鏡秘府論』保延点・穂久邇文庫蔵『五

行大義」鎌倉後期点などにも、「マイ」の加点が見られるため、これを日本漢音と認めるべきである。
仮名音注が無く、声点のみ加えられる場合も、次のとおり、濁声点が加えられている。おそらく、バ行音で発音されたものであろう。

巨牧 (入聲濁) には (五329) 司牧 (入聲濁) (五305) 陸 (入聲濁) (五55六100) 和睦 (入聲濁) す (八409) 輯陸 (入聲濁) す (五66) 穆 (入聲濁) 穆タリ (二14) 彌 (平濁) 綸す (一369) 美 (去濁) に (三89) 寐 (去濁) は (三35) 敏 (上濁) ニシテ (九240) 敏 (上濁) (九495) 閔 (上濁) は (三63) 胆 (上濁) 勉シテ (三292) 末 (入濁) 学 (一9) 冒 (去濁) 色に (二293) 羽旄 (平濁) を (七346) 毛 (平濁) (八354) 子卯 (上濁) には (七26) 磨 (平濁) 鑢シテ (三506) 大戊 (去濁) ソ (二389) 渠牟 (平濁) (十292) 謀 (平濁) 夫 (八478) 謀 (平濁) (三392) 孫謀 (平聲濁) (一49) 黙 (入聲濁) 語 (二404) 墨 (入聲濁) ナリ (二198) 墨 (入聲濁) (八144)

一方、本資料明母字に単声点が加えられた例として、すでに掲げた以外に、次の諸例がある。

撥音尾字

東韻・蒙 (平) は (六173) 童蒙 (平) (八511)
仙韻・綿 (平) 綿 (十273) 桓韻・滿 (去) (十116)
刪韻・侮慢 (去) セズ (二394) 侮慢 (去) す (三374)
慢 (去) 声 (八90)
庚韻・聰明 (平) (二3) 齊盟 (平) (五209)

なお、「蒙」に「ホウ」と加点了した例が一例存する。「蒙」(莫公反) (一157) の例であり、声点は加えられていない。「蒙」は、本資料内に、二例の平声単点加点了例が存した。「蒙求」諸本にも、「モウ」の加点了例しか見られず、図書館本『文鏡秘府論』保延点にも、「モウ」と加えられている。本資料の「ホウ」は、反切「莫公反」から導かれた「人為的漢音」であると考えられる。

その他、「弭」(亡爾反) (八355) 「嫩」(音美) (八65) と、反切・同音字注のみを加点了した例が存する。ともに、「ビ」の音を導くための注であろう。この両字は、撥音尾を持たない。次に、微母の漢字を見る。

本資料の微母字には、仮名音注加点了例一九例のうち、一八例にハ行の仮名が加えられている。次の通りである。

臺 (上濁) (一447六45453) 臺 (一489) 微 (平濁) (三376七47)
微 (三220) 侮 (上濁) (二394) 網 (上濁) (一24) 冕 (上濁) (九284426) 冕 (七350十256) 罔 (去濁) (五35) 罔 (上濁) (七82) 誣 (平聲濁) (六354) 鶯 (去濁) (八486) 亡 (二172)
残る一例は、「蔓」(成) 然 (六46) の「蔓」である。「蔓」(三63) の加点了がある。よって、「マン」を「蔓」の漢音形とすべきであろう。

また、右の例を含め、微母字への声点加点了例全三八例には、すべてに濁声点が加えられている。右以外の例を左に掲げる。
微 (平濁) (一474二117172108129143) 侮 (上濁) (三374) 聞 (去濁)

清韻・名 (平) 聞 (二7) 名 (平) (八115)
耕韻・萌 (平) 幼 (七71) 青韻・銘 (平) か (八115)

撥音尾字以外

泰韻・味 (去) 一旦に (六29)
脂韻・側媚 (去) (二513) 媚 (去) は (三441)
屑韻・蔑 (去) か (五371)
肴韻・貌 (去) 義 (八394)

右のうち、撥音尾字は、マ行で発音されたものであろう。撥音尾字以外で単点が加えられている「昧」には、先に掲げたとおり、本資料中に「マイ」の仮名音注加点了例が存した。「媚」には、「ビ」の仮名音注がある。久遠寺藏「本朝文粹」鎌倉中期点では「媚」(去濁) (九645) の例があり、「ビ」と共に濁声点が加えられている。よって、本資料の単声点加点了例は、双点の加点了が省略されたものであろう。

「蔑」「貌」は、ともに、本資料における唯一の声点加点了例である。しかし、他の漢音読資料には濁声点が加えられており、「ハツ」「ハウ」の仮名音注も見られる。「蔑」は、書陵部藏「春秋経傳集解」文永五年(一二六八) 点に、「蔑」(入濁) (一153) 「蔑」(八372) とある。「貌」は、京都大学人文科学研究所藏「天慈恩寺三藏法師伝」一一一〇年朱点に「貌」(去濁) (十286)、高山寺藏中原本「論語」に「容貌」(四94) とある。よって、この両字の日本漢音形は、それぞれ「ベツ」「パウ」であり、本資料では、双点を加点了すべきところを単点としたものと解釈される。

(二7三253八328十6) 亡 (平濁) (二349464466二168八204269)
望 (去濁) (一475六210) 網 (去濁) (十68) 問 (去濁) (十128522)
冕 (上濁) (一16九285)
これらのことから、本資料の微母字は、「蔓」の一例を除き、バ行音で読まれていたことが知られる。

なお、本資料の微母字には、右に掲げたとおり、「聞・問・冕・亡・網・望・冕・罔・網・亡」の撥音尾字が含まれる。これらも、すべてバ行音で読まれている点、明母字と異なる。この点は、「蒙求」諸本においても、同様である。「蒙求」諸本における微母字のうち、マ行音が付され、単声点が加えられているのは、「曼」の二例のみである。この二例は、姓としての用例であり、古い音が残ったものかもしれない。

このように、本資料および「蒙求」字音点諸本から、微母字の方が明母字よりも、バ行音で発音された漢字の割合が高いことが知られる。

一方、中国語音韻史において、微母の非鼻音化が明母に先行していたことは、敦煌文献を用いて、早くから指摘されるところである。
右より、従来から日本漢音とされてきた音体系も、微母の非鼻音化が明母よりも進んだ中国語音を母胎として成立した、と考えられる。

(3) 端・透・定、知・徹・澄母

これらの声母字は、日本漢音において、タ行音で写された。

本資料においても、原則はそのとおりであり、これらの声母字に濁声点が加えられた例は皆無である。

ただし、仮名音注に、次の異例四例がある。

端母・耽荒す (二382)。

本資料には、別に、「耽楽して」(三356)の例が存する。「シム」は、「沈・枕・忱」などの音との混同例であろう。

知母・繁は (三265)。

本資料内には、他に、「繁入聲シ」(三264)の例がある。「ケイ」では、韻も合わない。「ケイ」は、「繁・繫」などの誤認ではなからうか。

徹母・諺(支又反) (六354)。

本資料には、別に、「諺誤」(三311)の例が存する。「シウ」は、同時に加えられた「支又反」による「人為的漢音」であろう。

澄母・鍾(支又反) (七468)。

当該字音は、音符からの類推によるものであろう。いわゆる慣用音として、漢和辞典類に挙げられる音であり、その古例が得られたことになる。

(4) 泥・娘母

泥・娘母字も、唇音次濁字と同様、撥音尾字はナ行音で写され、それ以外をタ行音とするのが原則とされる。

本資料も、ほぼ、そのとおりである。

左は、泥母の仮名書き例の全例である。

撥音尾字

撥音尾字以外

囊(平)瓦(八329) 子囊(平)(八340) 囊(五262) 倭(二32) 寒煖(上濁)(七131)

帛(平聲濁)を(六454) 出内(去濁)に(九564) 匿(入濁)

は(五120) 攤(平濁)タルこと(三396) 諺(入濁)スルは

(八414) 私昵に(二268) 溺(入聲)音か(七360) 怒(入)は(三311)

右のごとく、泥母字の撥音尾字は、ナ行の仮名で表される。声点加え例も、大部分、単声点である。

ただし、撥音尾字「煖」が、「ダン」と読まれている。この字は、久遠寺蔵「本朝文粹」鎌倉中期点でも、「タン」と濁声点とが加えられていることから、漢音「ダン」を認めるべきであろう。

撥音尾字以外には、タ行の仮名音注しかない。しかし、最後の二字、「溺」怒には、単声点が加えられている。

「溺」は、久遠寺蔵「本朝文粹」鎌倉中期点に「溺(入) (十二469)、穂久邇文庫蔵「五行大義」鎌倉後期点にも「溺(入聲) (二271)、国会図書館蔵「古文尚書」清原宣賢点も「沈溺(入) (五55)、と単点が加えられている。また、「怒」は、本資料中に、もう一例の単点加え例「怒(入)焉タルこと」(三310)が存し、『毛詩』清原宣賢点にも「怒(入) (一198)と単点が加えられている。よって、この二字は、加点のとおり、「テキ」と読まれたことがあったものであろう。

なお、泥母字で濁声点が加えられている例として、先掲例

以外に、つぎのものがある。

撥音尾字 (追加例無し)

撥音尾字以外

弓弩(上濁)に(八355) 怒(去濁)(六345) 怒(上濁)(三62)

泥(平濁)に(二160) 泥(上濁)泥タリ(三457)

右によつて、撥音尾字以外の泥母字は、タ行音で読まれたことが確認される。

次に、娘母字への仮名および声点加え例は、左が全例である。

怱(入聲濁)怱(平濁)スルこと(二153) 号(平濁)は

(三372) 嗷(平濁)す(三371) 屈機(去濁)(二103) 伏匿(入

聲濁)セシムル(八521)

右のとおり、全例タ行の仮名と濁声点とが同時に加えられていることから、タ行音で読まれたことが知られる。

なお、娘母字には、本資料中に、撥音尾字への仮名および声点加え例が無い。ただし、反切を加えた「緘」(女板反) (八138)の例がある。撥音尾字ではあるが、この反切を漢音で読めば、「ダン」となる。高山寺蔵「史記」周本紀「鎌倉初期点には、「王緘(上濁) (601 632)「ただし、本文漢字は、ともに「緘」とする」とある。この「緘」も、日本漢音として認めるべきであろう。

(5) 見・溪・群、曉・匣母

これらの声母は、日本漢音において、カ行で表記された。

本資料でも、ほぼ原則とおりである。しかし、若干の例外がある。

溪母・愆は(二63) 愆(平)伏スルこと(二16)。

曉母・贈賄(上)(六79) 溝洫に(九284) 封洫(入)(五44)。

「愆」は、「衍」からの類推による付音であろう。書陵部蔵「春秋經傳集解」文永六年(二二六九)点に「愆(平) (一九32)、静嘉堂文庫蔵「毛詩」清原宣賢点にも「愆(平) 一負(去) (十三160)とある。この「ケン」が、本来の日本漢音である。

「賄」は、久遠寺蔵「本朝文粹」鎌倉中期点においても「賄」(二276)とされている。

「洫」は、高山寺蔵「論語」鎌倉初期点に「溝一洫」(七5)、建武本「論語」に「溝洫(入聲) (呼域反)」(第四帖207)、書

陵部蔵「春秋經傳集解」文永点「田一洫」(況域反) (二五34)、猿投神社蔵「文選」正安四年(二三〇二)点「城

一洫(入聲) (48)の例がある。建武本「論語」の例では、「經典釈文」「論語音義」の反切を引用している。しかし、それと仮名音注とが一致していない。書陵部蔵「春秋經傳集解」にも、反切が引かれるが、それと一致する「クキキ」の音注は「キキ」の外側に追記されている。猿投本「文選」の例でも、「キキ」の音を仮名音注の通常位置である漢字右側に記し、「呼域反」と合う「クキキ」の音注を漢字左側に付している。これらのことから、「洫」の漢音形としては、本資料に見られる「キキ」が当時一般的であったものと考えられる。

また、濁声点が加えられた例に、次のものがある。

見母・瑾母(上濁)を(六253) 躡(上濁) (俱禹反) 一々タリ(三143)。

「躡(上濁)」は、連濁例であろう。

「躡(上濁)」の濁声点は、「偶遇」などとの混同による加点点であろうか。静嘉堂文庫蔵「毛詩」清原宣賢点では、同一箇所を「躡(上) 一躡たり(六88)」と読んでいる。

溪母・欺(平濁) (六173) 欺(平聲濁) (六354)。

「欺」は、右の濁声点加点点二例が、本資料における声点加点点の総てである。ところが、濁声点を加点点するようになる鎌倉時代以降の『佛母大孔雀明王經』諸本では、平声または平声輕の単点が加点点されている。書陵部蔵『春秋經傳集解』文永六年点の該當箇所を見ると、「昭公八年」では「欺(去其反)」と反切のみを引用し、「昭公二十六年」では「誣(平濁)は欺(平)也」と、平声単点が加点点されている。よって、日本漢音として、本資料の「ギ」は異例となる。ただし、現代日本語では、「ギ」と発音することがあるため、現代の漢和辞典類では「慣用音」として「ギ」を掲げることが一般的である。本資料の例は、その古例であろう。

匣母・六(一) 駮(入濁) ナラクノミ(八476)。

「駮(入濁)」は、本資料における唯一例である。穂久邇文庫蔵『五行大義』鎌倉後期点には、「六(入) 駮(入)」と、本資料と同一語の用例中に、単声点が加点点されている。本資料の例は、連濁例であろうか。

上げている。岡本は、右が、日本漢字音独自の問題ではなく、中国唐代西北方言にも見られる現象であることを指摘している。しかし、それに挙げられた日本側の資料は、呉音読中心資料や近世の辞書であった。本資料の右例を、鎌倉時代中期における漢音読訓点資料の例として、これに加えることができる。

(7) 精・清・從・心・邪・莊・初・牀・山・照・穿・神・審・禪母
これらの声母字は、日本漢音において、サ行の仮名で書かれた。本資料においても、その通りである。ただし、左の例外一例がある。

照母・憐(七16)。

「憐」字の日本漢音としては、「セフ」が期待される。『経典釈文』の該當箇所(「禮記音義」一2オ)にも、「之涉反」とある。よって、本資料の「ケフ」は、誤認かと思われる。

また、濁声点を加点点した例に、次例がある。

心母・襄(上濁) 尺(八76)。

「襄」字は、『廣韻』には心母の反切しかない。しかし、右例の下欄には、「音讓」の音注がある。「讓」は、日母の漢字である。よって、右の濁声点は、下欄音注「音讓」に依って加点点されたものと考えられる。

照母・瞻(平濁) 一仰(上濁) (三54)。

本資料においては、当該例が唯一の声点加点点例である。「瞻」は、長承本はじめ『蒙求』諸本では、単声点加点点例しかない。

(6) 疑母

疑母は、日本漢音において、ガ行で写された。本資料においても、仮名音注の第一音節は、すべてカ行の仮名で記されている。

しかし、声点加点点例に単点のものが、これまでの次濁声母字に比べて、多い。次のような例である。

A. 本資料中に濁声点加点点例を有する漢字

嫌疑(平) (七9) 若敖(平) 氏(八338) 伍(上) タラン(八433)

B. 本資料中に単声点のみの漢字

①他資料に濁声点加点点例が存する字

疑(平) は(二106) 井儀(平) ナリ(八76) 偽(去) (三277)

寤(去) は(三35) 五(上) (二294) 過誤(去) セズ(三468)

妖孽(入) (七200) 孽(入) を(三403)

②他資料にも濁声点加点点例を見出せない字

三危(平) に(二25) 危(平) 懼(二108) 危(平) (六48 八329)

危(平) 亡(八204)

AとB①の諸字は、当該例において、双点の加点点を省略したものと考えられる。この省略例が他の次濁声母字に比べて多いことは、疑母字頭音は濁音となることが定着していたことを示すものかもしれない。

しかし、B②の「危」字は、他資料においても、濁声点加点点例を見出せない。日本漢字音において、疑母の「危研詣」などに清音形が存することについては、すでに岡本勲が取り

また、久遠寺蔵『本朝文粹』鎌倉中期点にも、四例の平声単点加点点例が存す。三卷本『色葉字類抄』前田家本でも、「豊(平) 瞻(平) ホウセム」(上四七オ4)と、連濁の可能性がある語中においても、平声単点が加点点されている。したがって、本資料の右例に、濁声点が加点点された理由は、不明とせざるをえない。

穿母・喘(上濁) (八514 520)。

右二例が、本資料における該字への声点加点点例の全例である。「喘」は、次清声母字ではあるが、久遠寺蔵『本朝文粹』にも、「餘喘(上濁) (六228)」と、濁声点が加点点されている。よって、日本漢音として、濁音形で定着していたものと考えられる。

審母・沈尹成(去濁) (六390) 三恕(去濁) (十232)

忠恕(去濁) (八425)。

「成」は、本資料における唯一の声点加点点例である。他資料の濁声点加点点例として、久遠寺蔵『本朝文粹』の「関成(去濁) (七485)」がある。この字も、日本漢音として、濁音形が認められていたものである。

「恕」は、本資料に三例の声点加点点例がある。もう一例は、初めに掲げた例の次行に、「三一恕(去) (十233)」とある。久遠寺蔵『本朝文粹』鎌倉中期点に「寛一恕(去) (二715)」高山寺蔵中原本『論語』嘉元元年(二三〇三)点にも、「恕(去) (八52)」と去声単点加点点例がある。よって、日本漢音としては清音であり、本資料における濁声点加点点例を、連濁例と考えるべきであろう。

禪母・噉(去濁)・市制反(入聲)・胡臘反(入聲) (二二二)。

右が、当該字についての本資料唯一の声点加例である。「市制反」の反切を加点しながら、濁声点を加点しているのは、不審である。あるいは、同じく全濁字でありながら、漢音読中心資料においても濁声点加例が存する「筮」の影響かもしれない。「筮」は、たとえば、久遠寺蔵「本朝文粹」鎌倉中期点、「易」筮(去濁) (七六) とある。

(8) 日母

日母は、日本漢音の頭音では、ザ行で定着した。本資料における仮名書き例も全例サ行であり、声点の大部分は濁声点である。

ただし、単声点を加点した、次の、四字五例がある。

柔平 (二三三) 九一例 (正) ニシテ (二三三) 仍平 (六七一)

仍平 一叔 (入) (二三三) 綏平 (七三三)

「柔」は、本資料中に、濁声点加例七例が存する (二二四、二四一、二六三、二八五、三〇五、三二五、三四五)。その中で右例のみ単点である。ただし、法華経音義類に見られる呉音声調は去声であるため、右例平声点加例が呉音「ニウ」を示しているとは考えられない。当該例では、何らかの理由で、双点の加点が省略されたものと考えられる。

「仍」は、久遠寺蔵「本朝文粹」に「数例(去濁)」(八八三)、京都大学附属図書館蔵「古文尚書」清原宣賢点「九一例(去濁)」(七二)と、濁声点加例が存する。よって、「柔」同様、

行の仮名を頭音とする。また、一七六例の声点加例に、濁声点は見られない。よって、音注加例は、全例、頭音がラ行音で実現されていたと考えられる。

三、むすび

以上、本資料の漢字声母がいかん表記され、それがどのような音を示したと考えられるかを見てきた。

その結果、本資料の頭音は、全体を通じて、基本的には、従来言われてきた日本漢音の体系に一致することが知られた。

ただし、その中であって、日本漢音体系からはずれる諸字の、比較的古い加例を指摘できたことは、重要である。

また、いわゆる清濁について、日本漢音として清音が原則である声母字の中で、「醜・濃・欺・襄・喘・戌」の諸字は、濁音形も認められていたのではないかと考えられた。これとは逆に、日本漢音において濁音が原則とされる疑母字「危」に、単声点が加点されている例を、複数指摘できた。泥母字「湖・怒」、日母字「仍・綏」にも、同じ可能性が存した。

このような指摘が可能であるのは、本資料の濁声点がいわゆる清濁について、厳密に加点されているからである。多数の声点加例の中で、濁声点を省略して単声点を加えたと考えられる例は、十五例に過ぎなかった。

加えて、本資料全体の加点は、他資料と比べて、誤認誤

本資料の例は、双点加例省略例と考えられる。

「仍・綏」については、右掲例が本資料における声点加例の全例である。書陵部蔵「春秋経傳集解」文永点には、「仍平」(二一九三)があり、他の日母字同様、濁声点が加点されている。ただし、静嘉堂文庫蔵「毛詩」清原宣賢点には、「仍平」(二二二)「綏平」(三三〇)と単点加例が存する。よって、この両字は、いわゆる清音で発音されることがあったものかもしれない。

(9) 影・于・喻母

日本漢音において、これらの声母字は、アヤウ行音で写された。本資料においても、原則はその通りである。

ただし、異例として、「穢(去濁)」(六三六)がある。「穢」字には、「エイ」と加点した例が本資料中に二例存する (七三三、七四七)。図書寮本「文鏡秘府論」保延点にも「エイ」の加点が存する (南65)。よって、「エイ」を「穢」の日本漢音として認めねばならない。本資料の「クエイ」は、「劇・鑿」などからの類推による加点であろう。

声点加例は、影母一八七例、于母四四例、喻母二二九例存する。その中に、濁声点加例は無い。

(10) 来母

来母の字は、日本漢字音において、ラ行で取り入れられた。本資料においても、一四六例の仮名音注加例は、すべてラ

読例が比較的少ないことも確認できた。

これは、経書の加点が、『經典釈文』という確かな依拠資料を有し、本資料が清原家累代の訓読法に基づき、規範的な態度で加点された結果であろう。

本稿の検討によって、金沢文庫本「群書治要」経部が、日本漢音の重要資料であることが確認された。

注

- (1) 有坂秀世『国語音韻史の研究 増補新版』(一九五七年、三省堂)、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)、沼本克明『日本漢字音の歴史』(一九八六年、東京堂出版)、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院)など。
- (2) 前注沼本著書、参照。
- (3) 原裕『東京大学国語研究室蔵「佛母大孔雀明王経」字音点分韻表』(「訓点語と訓点資料」第一〇一輯、一九九八年九月)、李京哲『東京大学国語研究室所蔵「佛母大孔雀明王経」の分韻表』(「鎌倉時代語研究」第二十二輯、一九九九年五月)、参照。
- (4) ここでは、沼本克明『日本漢字音の歴史』二四頁に整理されている、『大慈恩寺三藏法師伝』古点・「蒙求」長承三年点・「文鏡秘府論」保延四年点を中心に帰納されたものに依る。
- (5) 佐々木勇『日本漢音における反切・同音字注の仮名音

注・声点への反映について——金沢文庫本「群書治要」鎌倉中期点の場合——(「国語学」第五三卷第三号、二〇〇二年七月)、参照。

(6) 羅常培「唐五代西北方音」(一九三三年、歴史語言研究所単刊甲種之十二)、高田時雄「敦煌資料による中国語史の研究」(一九八八年、創文社)、参照。十世紀まで降るかと思える比較的新しい敦煌資料においては、微母は、「v」の段階に入っていたと考えられている(高田著書、九七頁)。

(7) ところが、「日本書紀」のα群に用いられた万葉仮名では、明母字は、バ行・マ行ともに使用されているものの、微母字は全例マ行音として用いられている(森博達「古代の音韻と日本書紀の成立」(一九九一年、大修館書店)九九頁、参照)。この点からも、「日本書紀の万葉仮名の背景となった漢字音と所謂漢音」とは断層が有る(沼本克明「日本漢字音の歴史」(一九八六年、東京堂出版)、一〇三頁)ことが指摘できる。

(8) 「注音本「開蒙要訓」と日本漢字音—清濁のゆれをめぐって」(「訓点語と訓点資料」第七八輯、一九八七年十月)。後、「日本漢字音の比較音韻史的研究」(一九九一年、桜楓社)に所収。

(9) 前注岡本著書六四頁に、慶長十五年版「倭玉篇」にも「ゼン」と付音されることが指摘されている。

(10) 注8岡本著書二七九頁に、慶長十五年版「倭玉篇」に

も「ジウ」と見られることが指摘されている。

(11) 注8岡本著書二七九頁では、「恕」の濁音例として、「色葉字類抄」と「倭玉篇」とを挙げる。ただし、「色葉字類抄」の声点は、上声濁である。「新訳華嚴經音義」「貞元華嚴經音義」には、「恕」に、上声濁点を加点した例二例、平声濁点を加点した例三例があるため、「色葉字類抄」の上声濁点は、呉音の濁音を示しているものと考えられる。

〔付記〕清田文武先生は、「この語を、鷗外は○回使っている。」と、授業中に、何ということもなくおっしゃる先生であった。「作家用語索引 森鷗外」が出版される前の話である。清田先生には、自分の目で確かめることの大切さを、お教えいただいた。

(広島大学大学院 助教授)

上海図書館蔵『三国英雄志伝』二種について

中 川 論

本はその他の六卷本との比較検討から、東京大学東洋文化研究所などに蔵される聚賢山房本だと分かった。後の二本は、いずれも残本であるが、本全体の構成から二十卷本であることが分かる。この二本の詳しい書誌的事項は以下の通りである。(「」内は略称。以下この略称を用いる。)

○四刻按鑑演義全像三国英雄志伝 二十卷 (美玉堂本)

卷一から卷十のみ存する。封面・序文・目録などおよび巻一の第一葉から第三葉表までを欠く。巻頭書名は巻二のものによる。また巻九の巻頭書名が「二刻按鑑演義全像三国英雄志伝」、巻十が「二刻按鑑演義全像三国志伝」となっている。上図下文の形式で、匡郭上部に小題を横書きする。半葉十七行、每半葉表葉の右側と裏葉の左側四行および表葉の左側と裏葉の右側三行三十七字、図の下中間十行行三十字。版心上部には多くは「四刻三国志伝」とあるが、一部「二刻三国志伝」または「三刻三国志伝」となっている箇所がある。しかし版式は変わらない。また版心下部に時折「美玉堂」と書肆名が見える。

『三国志演義』には三十数種類の版本が現存し、世界各地に蔵されている。従来『三国志演義』の版本について様々な研究が行われてきた中、筆者は『三国志演義』版本の研究において、できるだけ多くの版本を網羅的に調査し、それらを大きく「二十四卷系諸本」・「二十卷繁本系諸本」・「二十卷簡本系諸本」の三つの系統に分類して、諸版本相互の関係を考察した。さらに「二十卷簡本系諸本」は、その簡略化のされ方の違いから、「志伝グループ」・「英雄志伝グループ」の二つのグループに分けられることも明らかにした。

さて、最近になって上海図書館に従来知られていなかった四種類の『三国志演義』の版本が蔵されていることが分かった。その内の二本は巻頭書名を『新刻按鑑演義京本三国英雄志伝』と題する六卷本である。この六卷本の一つは封面によれば「尚徳堂」という書肆から刊行された本であり、もう一